

# ALTI BUYOH FESTIVAL 2006 in Kyoto <辛口評>

アルティ・ブヨウ・フェスティバルの公募公演シリーズの三日間が昨夜無事終了した。

前回 2004 年開催と同様に、全演目を客席から観るといふ苦行にも似た喜悦？を自分に課した。決して私だけではないと思うが、よほどのことがないかぎり同業他者の舞台には接しないものだ。

例年 5 日間 30 団体の公募選抜公演に比して、今回 3 日間 17 団体(うち韓国古典舞踊は結果的に参加できず 16 団体)に絞り込まれた分、全体的にいえば、作品世界の多様性という意味では些か寂しかった感は否めない。また玉石混淆はいつものことながら、作品の良質なものは多数を占めたと言い得ようから、必ずしも低調に終始したわけでもない。

今回の寸評はやや抽象的になってしまった傾向がある。直接作品に接しなかった人々にとっては、なにを言わんとしているのか解りにくい面もあるだろうが、この点はお許し願いたい。

2006.02.13

四方館 林田鉄

## - 第 1 夜 - 2/10 Fri

二つの岸辺 ~ カルテット・ヴァージョン ~ - 28 分 - セレノグラフィカ - 京都

構成・演出・振付：隅地菜歩 衣裳：高橋あきこ

出演：阿比留修一 指村崇 二軒谷宏美 隅地菜歩

Message 没頭できる話題の後は、しばらく黙ることもある。あいづちを打ちつつ、すき間を探す。  
誰かこの次、口火を切るか。

<寸評> 作者はコンテンポラリーであれなんであれ既視感に満ちた表象世界からいかに遠ざかりうるかを試みたいらしい。いわばコンテンポラリーの破壊、ダンスの解体作業を行なっているかのごとき世界なのだが、破壊即ち創造とはいかない。破壊は創造への必要条件ではあろうが且つ十分条件ではないことを銘記すべし。

作者言うところの、ダンスとは無縁な日常の「動作」というフィルターをかけたところから探し出され、紡がれる「身体操作」なるものは、そのフィルターゆえに日常性のなかにあふれるノイズをそのままにそこ - 表象 - に持ち込むことになる。ノイズを持ち込むことに No というのではない、ノイズに満ちた身体操作 - 動き - がありうるとすれば、それをしも日常的私語レベルから非日常的私語へと宙吊りにしなければなるまい。そのように止揚しうる仕掛けは構成や演出にあるのではない。動き - 身体表象 - そのものに仕掛けられなければならないのだ、と私は断定しておきたい。

Cncontacts ~ひととひととの間で起こること~ - 25 分 - MOVE ON - 大阪

構成・演出・振付：竹林典子

出演：竹林典子 小平奈美子 大野由喜 竹中智子 池田愛 北野万里子 湊智恵美

Message .あふれる涙 .楽しいことも悲しいこともあるけれど やっぱり .you + one  
.VOICE&VOICE

Contacts 誰かに何かを伝え自らの生を実感する。

ひととひととの間の空間で互いに感じあい存在していることを表現する。

一人、二人、三人、複数の場合、どのように感じ、生を実感するであろうか。

<寸評> バレエテクニックを基礎においてよく訓練されているらしい個々の身体技法は、伸び伸びと素

直で快いものであった。構成・演出も女性らしい発想のもとでよく整理されている。自転車とハシゴを使った SCENE( )も、ステンレスコップとスプーンで音をかき鳴らした SCENE( )も破綻なく巧みに処理されていた。

いわゆるソフィスティケートされたコンテンポラリー・ダンスとはいえようが、裏返せばお行儀のよい毒にも薬にもならない表現世界ということだ。これはもう作者自身の問題意識、人生観の深まり以外になす術はない。

**蜜 - Bouche de miel, coeur de fiel - - 25 分 - ビィ・ボディ・モダン - 北海道**

構成・演出：坂見和子 振付：宮沢菜々子 伊勢谷朋子 出演：宮沢菜々子 伊勢谷朋子

Message 宮沢：どこが変なのかわからないと言われつつ、変な人だと言われつつ、変な人なんだと悩みつつ、どこが変なのか探しつつ、変な人を楽しみつつ、変な人が幻像するサプリメント

伊勢谷：短大卒業後ジャズダンスと出会い、バレエ・HIP HOP・コンテンポラリー等、様々なジャンルのダンスを学ぶ。踊ることに魅せられ続けて 18 年。現在、五感を駆使し身体表現する自己の可能性を模索中。

< 寸評 > 副題の仏語の意味するところは「外面菩薩、内面夜叉」ほどのことらしいが、それを聞けばなおさらにこの作品の欠陥は構成・演出の責めに帰るところ大である。

象徴的な小道具として用いられた赤いトゥシューズへの A・B 二人の拘りや争い、そして各々の自身内部の相克などが展開されるが、彼女らの身体表象にはバレエ・テクニクが微塵も見受けられず、モダンそのもの、それも心理的表象を前面に出した身体表現だから、小道具の象徴性には異和がつきまとい、ただの観念的裏付けに墮してしまうのだ。

甚だ辛辣ながら、幼児がごっこ遊びのなかでシンボリックなものの存在を無意識に了解していく過程があるが、その象徴遊びを大人がなぞったようなもので、それがなぞりであるだけに救いがたいというものだ。

**道成寺～桜の中の清姫 - 25 分 - 古澤侑峯 - 神奈川**

構成・演出・振付：古澤侑峯 美術：小松沙鬼 演奏：福本卓道 ヤススキー 出演：古澤侑峯

Message 「花の他には松ばかり 暮れそめて 鐘や響くらん」

見目良き僧を恋したうら若い清姫は、逃げてゆく僧を必死に追いかけてきました。行く手を阻む日高川を蛇体になって泳ぎきり、ついに道成寺の鐘を見つけ、蛇体を鐘に巻きつけて、中に隠れる僧もろとも炎を吐いて焼き尽くしてしまいました。やがて清姫は血に涙を流して去ってゆきました。後には桜が舞い散っておりました。幻想的な昔物語を、地唄舞と尺八に、アフリカンハーブ、ギター、カリンバという取り合せで表現していきます。

< 寸評 > 舞い手は地唄舞の人だという。構成を二部に分けた。前ジテと後ジテよろしく、前段は春や春幼な恋、恋する乙女清姫の心象風景、後段は衣裳も代えて、蛇身となって恋する男を追いかけて追いつめ、鐘巻き焼き尽くす。

尺八の演奏はなかなかのものと見えた。民俗楽器の奏者は中央奥と上下前の三台の SP で音場を動かしてゆくのだが、この工夫が煩く過剰。和洋の音のセッションとしてはかなり面白く聞けるが、此方を面白がっていると舞のほう沈み込んでしまっ際立つことがない。日舞特有の残心の技も重ねれど、音場に吸収されていくから、印象形成がない。展開する時間のなかで形成力がもがれるということはただひたすら間延びする羽目に陥ることだ。

形成力を削いだもう一つの原因は、舞い手が与えられた広い舞台空間をその広いままに埋めようとしたことだ。和洋に限らず solo の舞踊たるもの、与えられた空間が広ければ広いほど、求心力を強め、上下方向の超越性へと向かわざるをえないのだが、その視点を欠いていたのではないか。

### 春の詩

- 17 分

- Lee Jung- Ballet Company - 韓国

構成・演出・振付：Lee Jung- (啓明大学教授) 出演：Lee Tae ~ Hyun 他 9 名

Message 春の風は愛を運ぶ、心地よい風に包まれて愛の花が咲く

春の風は愛を運ぶ、私の心も鮮やかな花の色に染めてゆく

暖かい春の色に染めてゆく

< 寸評 > 大邱の啓明大学で舞踊を学んだ OB たちで構成されたカンパニーと聞く。作者はオーストラリアでバレエを学んだと。

4 つの場面構成、音楽に Jazz 曲を使用していたのがシーンによって功罪半ばした。前半の 1、2 曲目ではプラス効果だが、後半の 3、4 曲目は曲調がハードで重く、振付と違和が大きく残りマイナス効果夥しい。振付はいかにも定番というしかないバレエである。音楽を目新しいものにしたからといって、振付に相応の工夫がなければ装いが新たになる道理もない。プリマドンナはじめ身体技術は一応の水準と見えるが、振付や技法は国際的レベルから遠く古色蒼然といったところか。

### - 第 2 夜 - 2/11 Sat

#### 片むすび - 幽色の気配 -

- 23 分

- Idumi Dance Company - 大阪

作・構成・振付：山田いづみ 演出：西村文晴 音楽：梅木陽子

出演：山田いづみ 梅木陽子

Message 片むすびはグッバイの結びです。片方の紐を引くだけですぐ解ける。人の縁の結びも片方だけでおさらば出来れば、この世の中の半分の悩みは消えて無くなる。片むすびは小気味いい結びです。幽は心の底に誰しもが持っている気配の事です。人の心の絡み合いで疲れ果てた人の心に、ふと湧き上がる気配です。色という字は男と女の絡み合う姿を象形化した文字らしく、艶っぽいものです。

- 以下略 -

< 寸評 > この舞い手と演奏者のコンビによるセッションはもう幾たび為されてきたのだろう。お互いに刺戟しあえる良い関係が続いてきたであろうことを窺がわせる舞台であったことは善しとしたい。

屏風を 9 張使って舞台に配置、空間を限定した。無論、舞台機構を利用した段差の変化もあるが、それらによって動きはほとんど平行移動することとなった。

冒頭、下手寄りに配した演奏者の背後から、ゆっくり身を起こして現れる趣向は、演出として成功したが、見るべきはその前後 4、5 分のあたりまで、演奏者をもう一人の演者の位置にまで高めてしまった演出は、そのこと自体否定されるものではないが、男声と女声を畳みかけるように使い分けた、なかなか見事な Voice-Control の表現力に、舞い手としての演者は脇方へと化してしまった。

今日のこの演出を経て、舞い手・山田いづみは、自らをあらためてシテ方へと振り返らせるべき方途を探り出さなければならない。

#### タバコ - TOBACCO

- 25 分

- Lee Hwa-Seok DANCE PROJECT - 韓国

構成・振付：Lee Hwa-Seok (大邱芸術大学教授) 演出：Mun Chi-Bin

出演：Seo Seung-Hyo 他 13 名

Message 振付中心のダンスだけではなく、Ballet を基本として Jazz、演劇的で、マイム的な要素も盛り込みながら 21 世紀に先立つ DANCE COMPANY を目指す。今回の作品は現代に生きる人々の葛藤、そして現代社会の不条理を「Tobacco Story」に通して表現し、観客と共に考えたい。

< 寸評 > 大きいソファを使って群像を配する演出は 80 年代のダンスシーンでよく用いられた。Tobacco - 喫煙行為 - を象徴化し、現代文明の頹廃や病巣を浮かび上がらせようという演出の狙いは一応成功しているだろう。赤いヒールはブランドや高級品志向に走らされる大衆の、憧れのモノそのものの象徴だ。

客席の反応は総じて良く成功した舞台といえるが、私などにはいずれの演出にも既視感がつきまとう。寺山修辞的世界の断片を垣間見るような場面もあったし、やはり 80 年代ダンスシーンのコラージュ的作品という印象から抜け切れない。

### 見えないつながり

- 17 分

- 木方今日子ダンスアート空間 - 岐阜

構成・演出・振付：木方今日子

出演：福田晴美 岩田純子 近藤千鶴 横山小百里 木方要

Message 希薄になってしまった人の心

いつの間にか誰もいなくなってしまった

< 寸評 > 一言でいえば、かなり未成熟なダンス・コンポジションといった作品。

舞台にはトラック競技のように白線が平行に何本か走っている。格差社会化が進む日本、その競争レースを勝ち抜こうと、挫折しかかったりなどギクシャクしながらも懸命に走りぬく、悲惨ともいべき群像を描こうという狙いか。終幕、コース分けされた白線は、演者たちが白のガムテープで走るように床に貼り付けて、倍加される。いくら懸命に走っても、彼らの努力や精進には関係なく、さらに競争は激化したという訳だ。

女子 5 名による構成だが、その動きは総じて音との相性もよくない。先述のような設定だから、動きはどこまでも、上手から下手への平行移動が主体となる。一度はそれを崩して波乱を招くような演出が必要だろうがそれもない。

みんな共通に、衣裳の背中に貼り付けられた大きな×印は、お前たちは落ちこぼれた、落伍者だと社会から烙印を押されたサインらしいが、この演出もまったくいけない。

### 砂時計

- 18 分

うまさきせつこ - 兵庫

構成・演出・振付：うまさきせつこ 映像制作：界外純一

出演：安藤あい 木村佳江 うまさきせつこ

Message 砂のように時は流れ、風のように過ぎ去ってゆく。人の魂は時の集合体である。

流れ過ぎ行く時にまつわる様々な想いを吸収し、魂は肉体を変えて生き続け膨らんでゆく。

私は一粒の砂に過ぎず、時の流れに溶け込んで行くが、与え合い、影響しあう魂として小さな時をつくる。

< 寸評 > プロローグは舞台天井から糸のように果てしなく落下する砂が一条の光に照らし出されて幻想的な効果。砂時計に託された「時間の呪縛のうちにしか生きえぬ人としての存在」を表象する。後半の中ほど、起承転結の転とみられる場面は映像を駆使。まず実際の砂時計が映し出され、ボール遊びをするまだ幼い女の子の黒いシルエットと重なり、やがては踊り手本人の現在の踊る姿へと変わり、映像のなかの動きと、同じ動きが踊り手によってなされ同時進行する。これもまた印象度は強く、作者

の狙い通りの意味形成を為している。

指摘しておかなければならない課題は、演出的に成功したプロローグから転の場面に至るまでの、ダンスシーンの形成力がまだかなり弱いという点だ。ダンスとは異なる表象でプロローグや転に値する場面づくりが印象度を強めれば強めるほど、それに拮抗しうるダンスシーンをもって対抗できなければならない、それがダンスを表現主体とすることを選び取った者の果たすべき仕事だと覚悟するべきだと思う。本来あるべき研鑽を期待したい。

**Ruby ~ Memorial**

- 21 分

**舞う Dance ~ Heidi S.Durning - 京都**

構成・演出・振付：Heidi S.Durning 音楽作曲：Jean-Francois Laporte

出演：Heidi S.Durning

Message 大地と母への思い

自然と命へささげる舞

< 寸評 > スイス人の父と日本人の母の間に生まれたという彼女は日本で育ったらしく、藤間流日舞の名取でもあり、現在京都精華大の教員を務める国際的に活躍するダンサーでもあるようだ。

作品は阪神大震災の犠牲者たちに捧げられたレクイエム、それは母への祈りでもあるという。

白い打掛を羽織りその下には赤い襦袢が覗く。動きはどこまでも静、それとコントラストをなすように機械音と旋律がミキシングされた音世界は重く激しい。それは自然を破壊してやまない傲慢なまでの現代文明を表象してでもいるかのようだ。その音の支配下のなかで、舞い手はひたすら祈りを捧げているかのごとくどこまでも静かに動く。何かが起こるわけでもない、祈りの儀式にも似た世界。

ひとつ大きな異和を感じざるを得なかったのは、冒頭近く、羽織っていた打掛を静かに床にひろげ、佇立しつつそれをしばし見つめたあと、あくまでそっとだがその打掛のうえに足を運び、両足で立ったことだ。それからは静かに安らぐかのように仰向けに寝たのだが、この打掛に足を乗せて立つという行為は、祈りの舞であればこそ、いくら虚構の表象世界としても許される所作ではないだろう。もし許容できうるとすれば、唯一、舞い手自身が神の御手に委ね捧げられた生贄としての身体、即ち生の否定としてある場合のみではないか。その視点からこの舞を観るとき、舞い手のありようはどこかギリシア的の女神にも似ておおらかに過ぎ、神と人との境界を曖昧なままに揺れ動いているように見えるのだ。

**Sou-Mon < 相聞 - >**

- 23 分

**- 四方館 Shihohkan - 大阪**

構成：林田鉄 演奏：杉谷昌彦 衣裳：法月紀江

出演：小嶺由貴 末永純子

Message われわれにとっての主題とは、身体的表象が< 舞踊 >へと転移しうる

その発生の根拠をひたすら尋ねゆく螺旋様の道行きにすぎない。

- 定家恋歌三首 - 散らば散れ露分けゆかむ萩原や濡れてののちの花の形見に  
かきやりしその黒髪のすぢごとくにうちふす程はおも影ぞ立つ  
年も経ぬいのちぎりははつせ山尾上のかねのよその夕ぐれ

< 後口上 > 自分たちが出品した作品を自ら評する訳にもいかないから、前口上ならぬ後口上として若干記しておくことにする。

After-Talk でも触れたが、私は 20 年この方、Improvisation - 即興 - をもって作品として提出するを旨としてきた。その拠って立つ作業仮説は、一言でいえば、蕉風俳諧の「連句的手法」にある。私はこのことを安東次男氏の著書「芭蕉七部集」で学んだ。といっても私は詩人でもなく句作人でもない。ただ

一介の動きでものを考える者にすぎないから、連歌や連句にあるように、座における蓮衆が丁々発止と即吟し一巻を成すありようを、身体の表象をもって為す表現世界へと換骨奪胎したいだけだ。

私の師・神澤和夫は、邦正美に啓示を受け、M.ヴィグマン、L.ラバンへと深く回帰し、余人を許さぬ舞踊の世界を現出せしめた。少なくとも私はそう確信している。いわば私にとって神澤和夫が示した世界は「正風」なのである。その正風世界を私なりに継承したいと考えたとき、どんなに遠かろうと彼の採った方法論を内懐から反芻していくのが弟子たる者の王道であろうが、彼と私は師弟でありつつも同時代を呼吸する者として、現実にはよくあることだが、哀しいかな反撥しあう力学も強く働いてきたのも事実である。私は、彼の正風を真に継承するには、むしろ独自の対抗手段をもって為すべしと思いついたところから、この作業仮設に邁進するしかない長い旅路へと歩みはじめたのだった。

いまここに、この作品を提示するにあたり、ささやかなりとも幾許かの確信をもって、この宣を記すことのできる僥倖を、多としたいと思う。

### - 第3夜 - 2/12 Sun

**The Wheel of Life - small tales, inspired by "ZEN" - 25分 - Oginos&CORE - 兵庫**

構成・演出・振付・音楽・照明 Plan : 荻野祐史

出演 : 鈴木桂 東良沙恵 上川未友 窪田郁音 平屋江梨 亀坂祐美子 西香澄

Message "The Wheel of Life" 2006 公演予定

2月 ダンスパートダイジェスト版 at 兵庫県立芸術文化センター

2月 ショートバージョン初演 at 京都府立府民ホール

8月 Full Length, World Premiere in UK

12月 Video Installation in Germany

<寸評> 作品のタイトルを「輪廻転生」と解すればよいのかどうかは作者に確認したわけではないので判らない。専門は数学だという作者の、バレエのポジショニングを基礎に、モダンテクニックで身体の分節化を為し、ラバン・コノテーションを架橋するという、自身の観念上に描かれた方法論が、現実の舞台から見えた印象をできうる限り深読みするにしても、舞踊における可能態としてありうるかどうかは今のところ不明としかいいようがない。

中学二年生(14歳か)を最年長とする少女たちのユニセックスな身体が、一定の抑制を働かせつつ現前される動きに、ある種の観念の欠片のごときものを感じるとしても、その体内に深く潜む生命の炎は、鋼鉄の器のなかの燠火のように、固く閉ざされたままだ。'60年前後の多場面形式の報告劇を思い出させるような、短い場面が一節ごとにピリオドを打たれ、点々と繋がれていく構成は、観念の数珠繋ぎにも似ていようか。

カンパニー結成から10年を経るといふに、踊り手たちが未だ少女のままというのも解せないけれど、やがて彼女たちが否応もなく大人の女としての性的身体を具えてきた時に、彼女らの体内に潜む燠火は、この観念上の方法論を喰い破ってまで、見事な灰神楽を巻き起こすのだろうか。それとも一人ひとりただ静かにその場を立ち去ってゆくのだろうか。

**ここはわたしの家**

- 18分

- 河合美智子 - 兵庫

振付 : 河合美智子

出演 : 宮澤由紀子 長井久恵 井上朝美 林かつら 佐野和子 藤原慶子 河合美智子

Message 緑の草原を、赤に塗ったのは誰

広い大地を、悲しみに塗ったのは誰  
強い風が、恐れと怒りを運んで  
そして明日を奪っていった

<寸評> この振付者は、動きの composition においては達者な人と見受けける。多要素を孕みつつ群の動きが2分30秒ほどだが、増幅させつつ展開されていたのは、収穫としたい。

動きそのもので物が考えられることは、昨今の舞踊現象においては貴重なことだと思う。ところが、振付者自身にはどうやらその自覚はあまりないらしく、観念でイメージを喚起し、盛り沢山にイメージのコーラージュを創っていかうとしている。上演18分のうちに12、3、或はそれ以上のシーケンスがあったのではないか。したがって此方は、観念のではなく、動きのイメージの数珠繋ぎとなる。

達者な、動きの composition が、その造形力というか形成力というか、それらにおいて continuity - 連続性 - を獲得し、自身にとって未知の表現領域に歩み出されんことを、期待したい。

**Sound of Sand** - 23分 - a-core-dance arts - ニューヨーク

構成・演出：Ayako Kurakake Yoko Heitami

振付：Ayako Kurakake Iratxe Ansa Santesteban

出演：Nohomi Barriuso Iratxe Ansa Santesteban 安東真理子 渡辺由美

Message a-core-dance arts はニューヨークを拠点とするコラボレーション・ダンス・カンパニー。今回のコラボレーションは Iratxe Ansa Santesteban、リオン・オペラ・バレエ、ナチョ・デュアート・カンパニーなどで、ダンサーとしてヨーロッパを中心に活躍中。この時代にこそ見つめなおしたミドルイーストの女性を共通テーマとした、彼女との共演となる。ダンサーは彼女のソロ作品も含め、ニューヨークより Nohomi Barriuso、東京より安東真理子・渡辺由美を招いている。

<寸評> ニューヨークからという遠来の、男性舞踊手も女性舞踊手も、よく鍛えこまれた肉体の魅力をいかんなく発揮していたし、それを讃美する客席の拍手も他を圧していた。

構成は、東京からという女性二人の contemporary・Dance をあいだに挟んで、男性の solo と女性の solo の三景。そのあいだの場面はいささか冗漫に流れた。異心同体か同心異体かは知らぬが、観念的イメージ先行の performance で既視感に満ちたものだ。

さて私は、鍛えこまれた肉体の魅力、と書いた。鍛えこまれた肉体による動きの魅力とは、また少し異なるのではないかというのが、私の問題意識だ。彼らの Performance を肉体のダイナミズムと賞することはできても、動きのダイナミズムと賞すべきか、この点において疑問を呈しておきたい。肉体のダイナミズムと動きのそれと、その位相のズレは一見微妙な問題のようだが、彼我の隔たりは意外に大きく深いものだと、私などには思えるのだが。

**PLANTATION** - 25分 - 浜口慶子舞踊研究所 - 大阪

構成・演出・振付：浜口慶子 衣装：伊東義輝

出演：井下秀子 平山佳子 高島明子 森本裕子 石井与志子 中島友紀子

伊東卓家 デカルコ・マリー 中西朔

Message ~異界ざわめく

道祖の神 わざや いかん~

<寸評> プロローグ冒頭の数十秒間は、即ち妖怪変化か魑魅魍魎か、彼ら一群の物の怪たちが姿をあらわす登場シーンは、奇抜な衣裳の効果もあってなかなか魅力的だった。ところが群の動きが展開し

ていくに及んで、その新鮮な驚きは掻き消されていく。

昔からよく知るこの人の振付は、元来、あまりリズムカルなものではない。長所と欠点は裏腹なもので、かなり難しいことではあるが、群によるノン・リズムカルな動きの連鎖が、時に功を奏して、スケールの大きい表現を生み出すことがある。嘗て、そういえる作品をモノしたこともある作家だが、一昨年と今回、どちらもその地点からは遠く隔たっているのは寂しい。

昨秋、一心寺シアターで演じられた作品を、時間制限のなかでコンパクトにまとめ変えたものというが、そのあたり整理の仕方も荒っぽいというか、大布を使った物の怪たちの大親分(文字通り大きかった)？の登場もアイデア倒れだろう。一群の物の怪たちの動きもまた精彩を欠いたものとしか映らなかったのは、再演に際して、新しく表象への課題を見出せないままに本番を迎えた所為かななどと思われるが、だとすればベテランの踊り手たちを多勢擁するチームらしくない後退ぶりだ。

フェルメール「眠る女」より - 夢の中 - - 25分? - - 佐々木敏恵テアトル・ド・バレエ - 京都  
作・演出：前原和比古 振付：佐々木敏恵 バレエマスター：永井康孝 美術：大谷みどり  
出演：三浦美佐 水野英俊 永井康孝 浅田千穂 西村まり

Message 画家フェルメールの「眠る女」は興味深い。中央でうたた寝をしている女の有様は言うまでもなく、テーブルのウィングラスや布、奥の間に続く扉や光の情景など、見て楽しむには有り余る情報量だ。中でも、壁に掛かっている絵に描かれている(目を凝らしてみなければならぬが)仮面の存在は非常に示唆的であり、作者の創作意図を空想するには格好の材料だ。今回のバレエ「夢の中」は、この偽りの寓意とされている仮面をヒントにして女の眠りの中に入り込んでみた。はたして聖女の見ている夢とは。

< 寸評 > Message にあるように創作バレエの小品。画家と肖像画モデルの貴婦人、そして大きな絵の額縁の中に夏の夜の夢の妖精パックのごとき仮面をつけた男性と女性二人を配し、この道化たちが絡んで繰りなす男と女のコミカルな夢の中の物語。

プロローグというより冒頭、一瞬だけ照らし出された、出演者紹介的なワンショットは洒落た演出。すべては貴婦人の夢の中の出来事か、はたまた画家もまた同時に見る夢の交錯か、単純なストーリーにみえて作者の仕掛けは意外にアイロニーたっぷり複雑な心理劇ともみえる。

その作者の仕掛けのなか、貴婦人と画家の動きも含めた表情性の、あまり豊かとはいえないこと、とりわけ画家役の踊り手からは、あまりうだつのあがらぬ朴訥を絵に描いたようなキャラクターしか見えてこず、演出が徹底されず曖昧なままに推移する。妖精パックよろしき仮面の男性の狂言廻しぶりだけが際立ち、客席の笑いを誘う。

画家役の白いシャツとベージュのズボンというまことに地味な衣裳も、作・演出の深謀遠慮あつてのことと思われるが、どうやらその狙いは空振りに終わったようで、客席まで届かない。後半繰り返しも見えて長く感じてしまったのは、貴婦人と画家、この踊り手たちの芸質に、演出の狙いを咀嚼し表象する土壌の乏しきが所為だろう。